

たかしょう

「うさぎのてんこうせい」



←QR からこの映画(約5分)をぜひ見てください。その後で記事(ネタバレ)を読んでもください。

※日本語の字幕が出ます。

2月16日(月)の児童朝会でこの「うさぎのてんこうせい」の映画を全校児童で視聴しました。この映画はオーストラリアのナタリーさんという映画監督が作ったものですが、ナタリーさんは小学生の時に何と12回も転校したのだそうです。主人公のアナベルに子どもの頃の自分自身を重ねてこの映画を作られました。

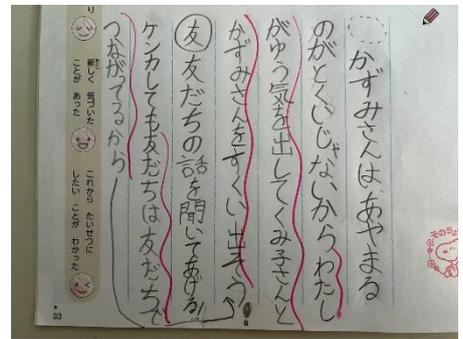


この映画の素晴らしいところは、いじめっ子を懲らしめて終わるのではなく、いじ

めっ子が手を出せないくらいの圧倒的な優しさで、場の空気を変えてしまうという点です。彼はアナベルのうさぎのお面を剥がすことで彼女をクラスの笑いや者にして、自分の支配力を見せつけようとした。しかし、クラスのみんなが「自分の顔にひげを書く」という予想外の行動に出たことで、彼が作った「いじめの空気」は一瞬で「助け合いの空気」に変わってしまいます。もし誰かが彼を怒鳴ったり罰したりすれば、彼はさらに反抗したかもしれません。しかし、クラスのみんなが取った行動は「彼を責めること」ではなく「アナベルに寄り添うこと」でした。自分のいじめが「みんなの連帯感を強めた」ことを見て、彼は自分のしたことの幼さや、格好悪さを突きつけら

れたはずです。

この映画に似た授業が高倉小学校でもありました。学校ホームページでも紹介(2/11)しましたが、2年3組の道徳の授業「ある日のくつばこで」という学習です。ある日、くみこさんの靴を隠しているかずみさんの姿を見て、かずみから「誰にもいわないでね」と言われ、何もできなかった自分の姿を悔やむ…。しかし何かを決心した!というお話から、どんなことを決心したのか考える学習でした。この教材のねらいは「善悪の判断から正しい行動をとる」でしたが、そのねらい以上に子どもたちの話し合いは深いものになりました。「隠してしまった子も、隠された子も友だちだから、話を聞いてあげる。でも正直に謝りに一緒にいて両方のお友達を助ける」とい



う結論でした。「本当に素敵で学級目標通りの考えだね…」と担任の先生も感動して子どもたちに「最高に素敵!」と伝えました。「いじめ」に対して「連帯した優しさ」で返していくという2年生の子どもたちの優しさを受容力に感動しました。

高倉小学校で1月に実施した児童アンケートで「いじめはどんな理由があってもしてはいけない」という項目があり、「そう思う」とはっきり回答した児童は87%でした。「ややそう思う」という肯定的な回答も含めると98.6%がいじめを否定しています。これを逆にみると、1.4%つまりあと7~8人は「そう思わない」「ややそう思わない」と回答しています。その子らの心情を考えると、そう書かざるを得ない何か「もやもや」を抱えているのかもしれませんが。高倉小学校の教職員と子どもたちの圧倒的な「優しさ」と「思いやり」で包み込み「友だちに寄り添うことの居心地の良さ」を共有できるようにしていきたいと思ひます。